「鎖国」の文学

小田実

「講国」の文学

小田実

講談社

「鎖国」の文学
一九七五年六月二〇日　第一刷発行

著　者　小田実
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)／振替東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
© Makoto Oda 1975, Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。　(文1)

目次

赤茶けた面積から
——「治者」と「タダの人」——　5
「見る」ことと「する」こと　39
「見る」「見られる」「見返す」で、どうなんだ？　69
「繁栄」の文学　99
「鎖国」の文学　143
191

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「鎖国」の文学

赤茶けた面積から

——「治者」と「タダの人」——

1

あ、これはあの赤茶けた面積を見た眼だな、と私はふいにあらためて思った。しかし、もうそのときには、彼の眼は閉じられていて、私の思いは、見た眼だったな、とあきらかに過去形のものとなっていた。そして、それが過去形のものとなればなるほど、同じようにあの奇妙に赤茶けた面積のひろがりを見た眼である私の眼はいっそう現在形のものとなって、つまり、私はその眼をたしかに今ももちつづけている、これからももちつづけて生きて行くよりほかにない。それは異状に重い、その重さがからだじゅうにひろがって行くような実感で、私はその実感にむきあうようにして、すでに冷たくなり始めた高橋和巳を見ていた。と言っても、眼のあたりだけを見ていたのではない。首から下を白い清潔なシーツでおおわれた彼のむくろ全体を私は見ていて、そのむくろがまるごと眼だった。実際、そのようなものとして、彼のむくろはそのとき私のまえにあったのだが、考えてみれば、彼の生そのものがそうだったのだろう。そして、彼の生がそんなふうなものだった

としたら、私の生きること（「生」というと、いかにもおさまりかえりすぎていて、私に似つかわしくない。それに完結してしまっているのである。生ま身のからだのにおいがしない。ナミダはあっても、汗と笑いはない）もまたそのようなものとしてあって来たし、今もあるし、これからもありつづけるよりほかにはない。

廃墟という気持はしない。廃墟ということばは、ちょうどギリシアやローマの遺跡がそうであるように、あるいはまた、ベルリンやドレスデンがかつてそうだったように（どうして、はるかに古いはずのギリシアやローマの遺跡が「ある」という現在形で、ベルリンやドレスデンの場合が「だった」という過去形なのか）、崩れかかった石造の建物がたちならび、巨大な円柱がおたがいを支えあいながら辛うじて立っているというふうな光景をさすのだろう。私と高橋が生まれ育った大阪には、そんな立体的な光景はどこにもなかった。あるのはただ赤茶けた瓦礫の堆積で、堆積はどこまでもひろがり、つづき、それはあくまで平面で、たしかに赤茶けた面積としか言いようのないものであった。

ここで、当時、さしもの日本第二の大都市、人口三百五十万の大阪もそうした赤茶けた面積、瓦礫の砂漠にすぎなかった、というのがふつうの言い方だろう。ただ、それは、私の実感ではない。大阪は面積にすぎなかったのではない。私にとって、その赤茶けた面積が、すなわち、大阪だった。それ以外に大阪のありようはなかった。高橋にとっても、たぶん、大阪は同じありようを示すものとしてあったのだろう。私も彼もそのありようを見た。いや、それ以外にありようのなさを見た。

彼は、「現代における想像力の問題」という話のなかで述べている（「人間として」5号）。「二十数

年たってみると、その焼跡なんてぜんぜんありはしない。東京のどこを歩いていたって、かつて日本の首都は完全に廃墟だったというようなことを示すものはどこにも残っておりません。しかし私の頭脳の中には残っているわけです。私がよく知っているのは大阪ですけれど、残っている。その焼跡のイメージを固執することによって、この現在の日本の繁栄を——繁栄そのものは民衆の力によって築かれたものですから、それを根本から否定しようとは思いませんが——それを正当づける繁栄論というのは、はったりじゃないかというふうな立場が、そこから、体験固執というところから築かれるのです。現実のこういう賑やかな繁華街を見ていましても、常に私の場合ですと廃墟のイメージというものがあって、比重から言うと、いま存在しないのだけれどその廃墟のほうの側に比重をかけているわけです。」

高橋は「廃墟」ということばを使っているが、この場合、同じことだ。私もまた、彼と同じ感覚を持つ。彼のおもおもしい言い方を私流にくだいて言えば、どっちが真実で、どっちが虚構か、ということだ。街を歩く。ときどき、私は、ふいに、奇妙な感覚におそわれる。眼前のビルディング、家のつらなり、自動車、人びと、そういったものすべてが途方もない虚構のように見えて来て、そのとき、私にいいようのない現実感をもって迫って来るのは、記憶のなかのあの赤茶けた面積なのだ。私は体験に固執しようとは思わない。体験が私に固執する。

赤茶けた面積のなかにいた人すべてがその面積を見たのではないと私は思う。多くの人がそこに「過去」を見ていた。建物がたち、自動車が走り、人びとが歩いているという「過去」を見ていて、面積を面積として見ていたのではない。眼前に展開していた赤茶けた面積という「現在」はあり得べくもない、あってはならない虚構だった。そして、そのころ、人びとは「過去」とダブらせ

たかたちで「未来」を見ていたのだろう。その「未来」は、同じように建物がたち、自動車が走り、人びとが歩いているという「未来」で、それは「過去」とじかにつながり、虚構である、虚構にすぎない「現在」、つまり、赤茶けた面積を視界の外に放り出していた。いや、そうすることによってのみ成立した「未来」だったと、そんなふうに言ったほうが正確だろう。第一、こんなただの面積にすぎないものが、どうして、大阪という大都会であり得るだろう。面積は悪夢であり、悪夢は一刻も早く忘れ去るべきものだった。そして、幸いなことに、多くの人びとにとってそれはそうなったのだが、さて、しかし、その面積を見た、見てしまった人間たちにとってはどうか。

2

『方丈記』のように万物が崩れ落ちるという感慨を私がそこでもったというのではない。万物が崩れ落ちるためには、まず、万物が存在しなくてはならないのだが、それは、たとえば、堀田善衛には言えても、私に言えることではない。堀田善衛の『方丈記私記』を裏うちするものは、彼が『若き日の詩人たちの肖像』のなかで書きしるした、まことに「万物」ということばがあてはまるような、ゆたかな体験だが、私にはそんな体験はかいもくなかった。もちろん、そこには堀田がそうした「万物体験」をする立場に恵まれていたという事情もあったにちがいないが、おしなべて言って、戦争は人間の体験を貧しくいかにも貧寒としたものにさせる。体験を勝敗、あるいは、生存（はじめ前者があって、そのうち、後者が圧倒的に強くなるだろう）に収レンさせて、ゆたかさへの可能性を封じてしまうのである。もちろん、そこに収レンされることで、体験の深さはいやおうなしに深まるだろう。しかし、それはゆたかさを犠牲にしての深さで、一口にまとめあげて言えば、戦争

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

体験はどれもこれも痩せている。深さは深いかも知れないが、みごとなまでに狭い穴なのである。

まして、私は子供だった。「万物」はなかった。私のからだのなかに、それはまだなかった。したがって、大阪の街が焼け、赤茶けた面積のまっただなかに放り出されたとき、私は崩壊感をもったわけでもなければ喪失感に悩まされていたわけでもない。あるいは、解放感を感じたというのでもない。私はまったくあたりまえのことのようにして、面積のなかに入って行ったように思う。つまり、私は面積をまさに面積として見ていたのだろう。そうとしか言いようがない。

世代論をやるつもりはない。げんに、たとえば、石原慎太郎は私と同年だが、彼はそうした面積を見た眼をもっていないし、また、もっていないことを自分の文学のよりどころとしているのだろう。ただ、がいして言って、私の言うような意味であの赤茶けた面積を見た人間が私の年ごろに多いことは、これは否めない事実だ（年齢を言っておこう。私は一九三二年生まれ。高橋は私より、一歳年上であった）。「焼跡派」とか「焼跡の世代」とかいうことばがある。それがたんに焼跡のなかで育ったという意味ではなく、それを見た世代であるという意味で使われることばなら、私もまたまぎれもなく「焼跡派」、「焼跡の世代」のひとりなのだろうが、ただ、このことばにはどこかに景気がよすぎるようなところがあって、「バイタリティ」とか「エネルギー」とか、あるいは、「野放図」、「無鉄砲」とか、そういったことばに呆気なく結びつけられて、かんじんのことがらがどこかへ行ってしまうような気がしてならない。かんじんのことがらはいくつかあった。そして、「バイタリティ」も「エネルギー」も、「野放図」も「無鉄砲」も、それらはむしろ附随的なことで、かんじんのことがらではなかったように私は思う。

ひとつは、これがおそらくもっとも、カナメのことがらだったが、私たちには何にもかつぐもの

がなかったということだろう。あるいは、何にも踏み台にするものがなかった。それらすべては、赤茶けた面積をつくり出した火焔のなかでたぶん燃えつきてしまっていたのだろう。私は、私の背丈だけで、赤茶けた面積のなかに立っていた。背伸びさえ私はしていなかったように思う。私の足の下は瓦礫で、きわめて安定がわるく、背伸びは危険だった。

このごろの若者なら、たとえ、中学生でも（私はその年だった）かつぐものはひとつははっきりときまっていて、それはマルクス主義だ。マルクス主義をかつげば、すべて世界は見通しで、そして、たちまち、自分は正義の味方につける。いや、このごろは正義ということより抑圧された人たちの側につけるということが大切で、たとえ、マルクスにとりついたのが数日まえのことであっても、もう何年も抑圧された人たちの側に立って来たような顔ができる。と言うより、ほんとうにそんな気持になれるし、なってしまうのである。あるいは、そのついでに、革命をかついで、威丈高にへっぴり腰の中年男どもをやっつけることもできるだろう。そんなのは、たんなるヒューマニストの運動にすぎない。そんなのはたんなる体制を補充するための……私はここ何年、そうしたことばをくり返してきいて来たことだろう。年々歳々、ことばは同じで、ただ、若い発言者の顔がちがっていた。新しい顔が現われるのは判るが、古い顔が消えてしまうのはどうしてだろう。また、その顔はどこへ行くのか。

いや、話は、戦争中のことだ。戦争末期――あの何にもかつぐものがなかった時代のことだ。ここでひとつ、ついでのことにことわっておこう。その何にもかつぐものがなかった時代というのは戦争末期のことで（たかだか、半年ほどのあいだだった）、八月十五日以後のことではない。戦争がすんだあとでは、民主主義をはじめとしていくらでもかつぐものが私たちのまえに現われ出て来

た。それは今さらあらためて言うまでもないことだろう。

平和な時代なら、私たち――いや、私の話をしよう。そのほうがすべてはっきりする。私は弁護士の息子で、それこそ、比較的に言えば「ええしのボン」で、大した「ええし」でないにしてもその自分の社会のなかでの位置をかつぐことができたかも知れない。その上、私は大都会の生まれで、根っからの都会人で、それだって鼻にかけようと思えばできただろう。しかし、この「ええしのボン」は単純に、また極度に飢えていた。「ええし」は、そのころ、軍需工場に勤める「産業戦士」であり、農民であっても、私ではなかった。それに、赤茶けた瓦礫の堆積の上に住み、なんとかしてジャガイモをつくろうとし土まみれになっていた人間が何が都会人なものか。その皮肉は、子供心にも、判っていた。奇妙な、しかも、ある意味では徹底した「階級」の逆転がそこにはあって、私はかつぐべきものとしての「階級」をすでに失なっていたのである。

つい数ヵ月まえなら、私はまだ、「聖戦」をかつぎ、「神国日本」をかつぎ、「大東亜共栄圏の樹立」をかつぎ、天皇陛下のために死ぬ（であろう）自分をかつぐことができた。もちろん、私はまだ、赤茶けた面積のひろがりのなかでも、それらをかついでいたが、それはいかにも自分でかついでいることが自分にもはっきりと感じとられるかつぎ方で、したがって、いかにも、他人事だった。タテマエすぎたのである。私と友人たちは、もう、たたかいそのものについて語ることはまれになっていて、私たちの主要な話題は、かつてのように新型戦闘機のことではなくて、講談本の主人公のことだった。いったい、いつのまにそんなふうなことになってしまっていたのだろう、と言って、講談本の主人公のように勇気をかつぐこともなかった。かつげば、その大言壮語も、翌日の空襲のなかで、きれいに化けの皮をはがれた。若さをかつぐこともなかった。平和な時代なら心ひ

そかに若さをかついで、死ぬのには「順番」がある、老人が先に死ぬのは当然のことで自分の「順番」はずっと先のことだと「確信」できたにちがいないのだが、そこでは、その「確信」は何の役にも立たなかった。大人も子供もともに同時に火焔にまかれて死に、「順番」はどこにもなかった。あるいは、肉親をかつぐこともなかった。親は子供を愛し、子供は親を愛するものだと主張したところで、ジャガイモ一個のことで親子が殴り合いの喧嘩まですることをさけられなかった。道徳をかつぐこともなかった。それにはどこかで穴があいていて、穴があいていないと、生きて行くことはできなかっただろう。道徳がそうなら、法律はむろんそうだった。こちらから押し進んで穴をあけないかぎり、つまりは、法律を破らないかぎり、私たちは生きて行けなかったし、生きている以上は、確実、着実に私たちは法律を破っていた。

すべてが、そのころ私たち中学生のあいだで公然と用いられていた言い方を使えば、「アホみたいなこと」になっていて、それゆえ、私たちはかつぐべきものを失なってしまっていたのだろう。今からふり返って考えてみると、あの赤茶けた面積は試金石だったような気がしてならない。すべてがそこにおかれると「アホみたいなこと」になった。そのテストに耐えられるものは、何ひとつなかったように思う。

何もかつぐものがないということは、逆に言うと、私たちが、何かに拘束され、何かのために生きていたのではないということだろう。「天皇陛下のために死ぬ」ということはそのころの考え方では「天皇陛下のために生きる」ことの至高の表現だったのだが、私が死ぬとしたら、たかだか火焔のなかを逃げまわって黒焦げの虫ケラのような死をとげるだけのことで、そんなことが「天皇陛下のために死ぬ」ことのどこにもつながっていないことは、私は十分に知っていた。そして、その

死は、もちろん、「お国のため」にも「大東亜共栄圏の樹立」にも、神国日本の皇統レンメンたる歴史にも、「もののふの道」にも、ありとあらゆる大目的、大義名分に結びつこうにも結びつきようのない死だった。死がそうなら、まして、私の生はそうだった。どこにも結びついて行かないものとして、私の生きていることはあった。いや、もっと小さなことがらを考えてみてもよいだろう。私が生きていることは、たとえば、勇気にも、親孝行にも、若さにも、どこにも結びついて行きはしなかった。私は生きていた。強いて言えば、生きているから生きていた。

何かをするために生きていたのではなかったから、私には、そのとき、何かを「しなければならない」という当為はなかった。くり返して言うが、「生きなければならない」から私は、生きていたわけではない。生きているから生きていたのである。当為もなければ、それと表裏の関係に立つ、こう「あるはず」だという必然もなかった。人間は、何かをするために生きているはずでもなかったし、それゆえに、何かをしなければならないこともない。あるいは、何かをして、こうあるはずだということもなかった。ことばをかえて言えば、当為の対象となるものも、必然を保証するものも、私はともにもっていなかったのである。それゆえ、私はふしぎに自由だった。それは、たぶん、あっけらかんとした、吹き抜けたところのある自由だったのだろう。さっきも述べたように、私はそこで解放感を味わっていたわけではない。私にはその必要はなかった。理由はしごく簡単だろう。私自身が解放だったのだから。

3

私は奇妙にませていた。戦争が終りに近づくにつれて、大人たちが自信を失ない、彼らの背中が

見えてきたということもあった。空襲の火焔のなかで、大人たちもまた怖れ、おののき、逃げまどい、要するに、彼らもまた、人間であった。ということは、子供同様の存在だったということだろう。私の眼には、まさにそんなふうなものとして、大人たちは見え始めていた。

しかし、そうかと言って、私は大人たちを馬鹿にしていたのではなかった。それもまた、たしかなことであったように思う。空襲の火焔のなかで逃げまどう大人たちをわらってみることは、同じように逃げまどう自分をわらうことであった。大人たちが方向を見失なっていたとしたら、私も同じだった。大人たちが明日の運命を知らないように、私も知らなかった。私もまた、大人たちと同様に人間、いや、子供であり、それ以上でも、それ以下でもなかった。ことばをかえて言えば、私に彼らの背中が見えていたとすれば、彼らにも、もちろん、私の背中が見えていたのであり、第一、彼らの背中を見ること自体が私の背中を見ることだった。

そこから、一種の思いやりが生まれて来たとしてもふしぎはないだろう。人間であることに対する思いやりだと言ってもよい。私は大人たちにも、また、自分にも、それを感じていた。人間のどうしようもなさに対する思いやりだと言ったほうが、もっと思いやり自体に密着した言い方かも知れない。それほど、せっぱつまった、ぎりぎりのところまで来ているのでかえってやさしく微笑するという感じの思いやりだった。

それは、私が生き死にの視点からものを見始めていたからでもあるのだろう。赤茶けた面積のひろがりが私にその視点を強いた。と言って、人間は死ぬものである、という真理を今さららしく教えたというのではない。人間は死ぬものだが、そのとき、その場で死ぬのは、たとえば、私であって、私以外にはなくて、他の誰かでは決してないことを、それは事実の実物教育で教えたのであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com